

大阪市立大学生活科学部紀要・第46巻（1998）

「媒介・過程モデル」の特質と援助過程研究

— ソーシャルワークの固有性の具体化に向けて —

岩間伸之

A Study on the Characteristics and Helping Process in "Mediating-Process Model"

NOBUYUKI IWAMA

1. はじめに

本稿は、「媒介・過程モデル」(mediating-process model)の特質とその援助過程に関する論考である。「媒介・過程モデル」は、ウィリアム・シュワルツ(William Schwartz)によって構築されたソーシャルワーク理論(相互作用/媒介モデル)を基礎部分とし、そこから理論的に発展させるべく筆者が取り組んできたソーシャルワークモデルである¹⁾。「媒介・過程モデル」の構築に際しては、2つの目的がある。その一つは、「媒介・過程モデル」の基礎理論となるシュワルツ理論の理解を深めた上で、その独創性に基づいて深化させることである。もう一つの目的は、「媒介・過程モデル」の構築に向けた論証過程において「ソーシャルワークの固有性」を援助の機能面から明確にすることである。

「ソーシャルワークの固有性」をめぐっては、従来からソーシャルワーク研究の重要課題の一つとして取り扱われてきた。しかしながら、この課題は社会福祉基礎構造改革や介護保険制度をはじめとする新しい社会福祉の制度的潮流下においても喫緊の重要課題として認識されなければならない。ケアマネジメントに代表される地域生活の健全な維持を目指した保健・医療・福祉の連携という視点からの実践は、ソーシャルワークの関係者に重く大きな課題を突きつけることになった。つまり、具体の事例を目前にして隣接の諸領域の専門職と否応なしに連携を求められることによって、「社会福祉の援助とは一体が何ができるのか」という問いに対する言語化と問い直しを迫られることになったのである。このことはソーシャルワークの理論的未熟さという側面だけでなく、社会福祉の実践を外に向けて説明する術の未熟さという2つの側面を含んでいたのではないと思われる。

そしてソーシャルワークの理論研究に今求められてい

るのは、社会福祉そのものからの内発的發展によるソーシャルワーク固有の実践理論であり、社会福祉の理念・哲学・思想と実践を支える背景理論及び援助方法の一貫した実践理論と実践モデルの形成ではないかと考える。それは隣接の諸領域に向けて具体的に説明できるものでなければならない。本稿は、そうした現代的なソーシャルワークの課題にも寄与しようとするものである。

「媒介・過程モデル」の構築にあたって、基礎理論であるシュワルツ理論の独創性に基づいて深化させること、そして「ソーシャルワークの固有性」を機能面から明確にすることは、必然的に本稿のオリジナリティとなる。

本稿では、まず「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への展開とその特質についてまとめた上で、「媒介・過程モデル」における援助過程について考察を深めることにする。

2. 「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への展開とその特質

1) 「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への展開

「媒介・過程モデル」は、シュワルツによる「相互作用モデル」を基礎理論として発展的に展開させたソーシャルワークモデルである。シュワルツのソーシャルワーク理論についてはすでにいくつかの点から考察を深めてきた²⁾。ここでは、「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への展開のプロセス、つまりモデルの構築にあたって「相互作用モデル」のどの点を発展的に展開させたかに焦点を当てる。

この展開のプロセスを分かりやすく示すため、「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への主要概念の展開を、図1で図示した。この図は、「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への展開(図の左から右)に

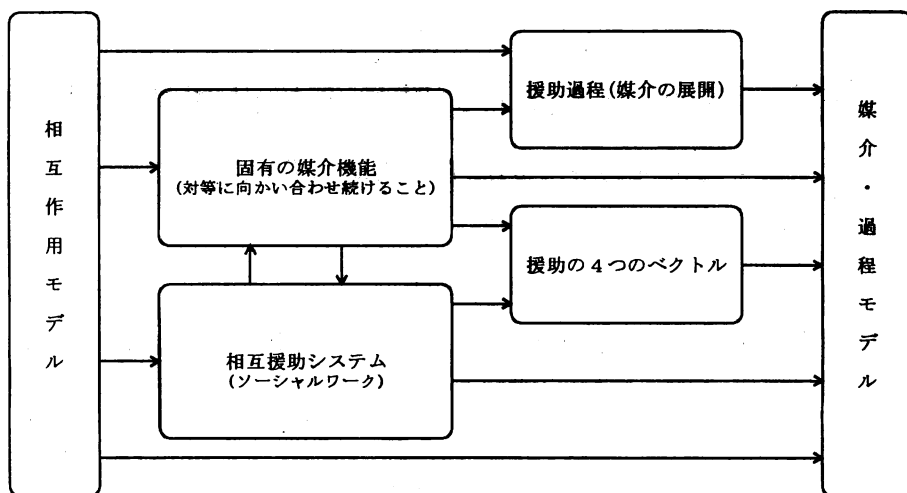


図1 「相互作用モデル」から「媒介・過程モデル」への主要概念の展開

あたって、相互作用モデルをそのまま引き継いだ内容に加えて新たな概念として展開させた内容には、「固有の媒介機能」「相互援助システム」「援助過程」「援助の4つのベクトル」という4つの要素があることを意味している。これらの4つの内容は、「媒介・過程モデル」の基本要素となるものである。

これらの4つの要素の展開について、この図を用いてそのアウトラインを提示しておく。

まず、相互作用モデルからは、「固有の媒介機能」と「相互援助システム」の2つの「媒介・過程モデル」の中核となる概念を発展させた。ここでいう「固有の媒介機能」とは、シュワルツがソーシャルワーク固有の機能として説明した「個人と社会がお互いに手を差し伸べる過程を媒介すること」という「媒介機能」を発展させたものである。「媒介・過程モデル」においては、援助機能としての「媒介」を「対等に向かい合わせ続けること」と定義した。ゆえに、ここでの「媒介」には、「対等に向かい合わせる」とそれを「続けること」の2つの機能を含んでいる。

もう一方の「相互援助システム」は、シュワルツ理論において極めて重要な援助の概念であったが、具体的な展開においてはグループワークを念頭に置いたものであった。「媒介・過程モデル」においては、それをソーシャルワーク全体に概念を広げた。問題解決の媒体としての「相互援助システム」の考え方は、本人及び当事者の主体的な問題解決を具現化する概念となる。

この「固有の媒介機能」と「相互援助システム」は、相互に深い関係を持ちながら概念を発展させている。つまり、「媒介・過程モデル」における当面の援助目標は、「相互援助システム」を構築することであり、そのため

るからである。

この2つの要素からさらに2つの要素を導き出している。それは「援助過程（媒介の展開）」と「援助の4つのベクトル」である。

「援助過程（媒介の展開）」は、「固有の媒介機能」の展開をシュワルツが提示した援助過程の枠組みを踏襲して提示したものである。シュワルツが用いた準備期、開始期、作業期、終結期という過程について、開始期以降を5段階に分けて媒介の具体的な展開を示した。その5段階は、クライアントとシステムとの相互作用関係の特質とその変化に焦点を当てたものである。

また「援助の4つのベクトル」は、「固有の媒介機能」と「相互援助システム」の2つの流れを受けた概念であり、媒介と相互援助システムの概念をより大きな視座で捉えたものである。これは、すべてのシステムの変化とは本人を援助の起点とすべきであることを強調し、そこから家族、地域、社会というより大きなシステムの創造へと広げていくという概念である。

2) 「媒介・過程モデル」を支える4つの基礎概念

「媒介・過程モデル」は、シュワルツのソーシャルワーク理論（相互作用／媒介モデル）から4つの基本要素を新たに発展させたモデルである。ここでは、「媒介・過程モデル」の特質として、これら4つの基本要素、すなわち①機能としての「対等に向かい合わせること」、②問題解決の媒体としての「相互援助システム」、③援助の4つのベクトル、④援助過程としての5つの相互作用、の4つについてその概略を明らかにする。これらの4つの基礎概念は、「媒介・過程モデル」を支える特質でもある。

①機能としての「対等に向かい合わせ続けること」³⁾

「媒介・過程モデル」の最大の特徴は、シュワルツがソーシャルワーク固有の機能として明確化した「個人と社会がお互いに手を差しのべる過程を媒介すること」という媒介機能を発展的に展開させ、「媒介し続けること」(keeping on mediating)としたことである。この「媒介し続けること」は、2つの機能を併せもつ。その一つの機能は、「媒介すること」である。ここでいう「媒介」とは、クライアントとシステムを「対等に向かい合わせること」という機能を意味する。もう一つの機能は、この媒介(対等に向かい合わせること)を「し続けること」(対等を保持し続けること)である。したがって、「媒介・過程モデル」における援助機能とは、この2つを合わせた「対等に向かい合わせ続けること」となる。これはシュワルツがソーシャルワーク固有の機能として明確化した媒介機能を進化させたものであり、単に2つのものを結びつける、あるいはその間に立って橋渡しをするというような辞書上の単純な意味ではない。媒介(対等に向かい合わせること)とその過程(し続けること)を強調したモデルであることから、便宜上「媒介・過程モデル」と名付けることにした。

図2のトライアングルモデルは、シュワルツによるソーシャルワークの媒介機能を高度に概念化したものであった。そこから「媒介・過程モデル」の独自機能として発展させた「対等に向かい合わせ続けること」という媒介概念を図示したものが図3である。この図においては、ワーカーの援助機能である「対等に向かい合わせ続けること」を(A)段階から(C)段階への展開過程として示している。なお、ここでいうシステムとは、家族やグループ、職場、近隣・地域、サービス供給主体、行政等のクライアントを取り巻く上位システムのことであり、多レベルの社会環境や問題解決に向けて必要となるすべての社会資源を指している。

(A)段階では、媒介者であるワーカーが不全的關係(図中の波線)にあるクライアント(要援護者)とシステムを媒介し、両者間の相互作用の促進を開始する。そして、(B)段階では、両者間に「対等な関係」が形成されるように働きかけることがワーカーの仕事となり、(C)段階ではその対等な関係を保持しながらさらに相互作用を促進させることになる。この(A)から(C)への展開がこのモデルの援助過程となる。

「媒介・過程モデル」に顕著な機能的特質は、この(A)から(C)への展開において「アドボカシーの機能」と「クライアントの自己決定」をワーカーの機能面から明確にしたことである。つまり、(B)段階において対等な関係にまでシステムを持ち上げるという機能はソーシャルワーク機能として重視されてきたアドボカシーの機能を具体的に説明するものとなる。また、(C)段階においては、問題解決に向けて当事者たちが取り組むのをワーカーが支援し、そしてその行き着くところを決めるのは本人自身であることを示唆している。これはソーシャルワークの本質の原則である「クライアントの

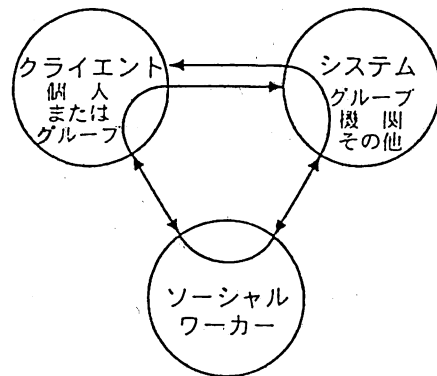


図2 トライアングルモデル

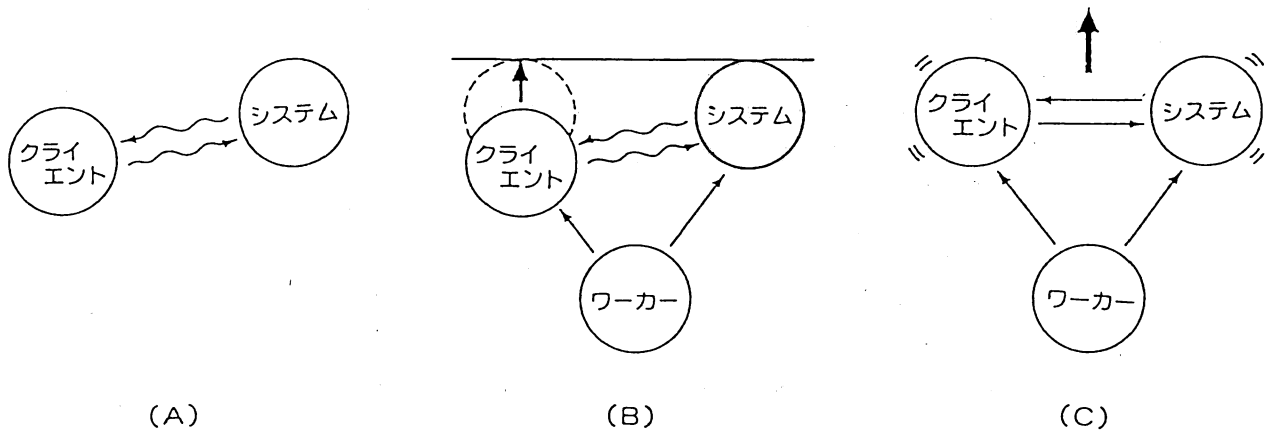


図3 「媒介・過程モデル」における媒介機能

自己決定」を具体化する一つの方策となる。

以上のように、「媒介・過程モデル」の特質は、独自性の高い援助機能の明確化にある。この機能の明確化は、「ソーシャルワークの固有性」を明示するための説明概念となりうるものである。

②問題解決の媒体としての「相互援助システム」

シュワルツの相互作用モデルにおいて、「相互援助システム」の概念は極めて重要な構成要素であった。「相互援助システム」の特質については、すでに「共生モデル」と「有機体モデル」の2つの側面から明らかにし、さらにグループワークにおける問題解決に向けた相互援助システムの力動をシュルマンの見解に基づきながら、①情報の分かち合い、②弁証法的過程、③タブー領域についての話し合い、④「みんな同じボートにのっている」現象、⑤相互の共感的支持、⑥相互要求、⑦個人的な問題の解決、⑧リハーサル、⑨「数は力なり」の現象、の9つの力動について論じてきた。

相互作用モデルを発展させた「媒介・過程モデル」においても、当然のことながら「相互援助システム」はモデル構築に向けた基礎概念の一つとなる。「媒介・過程モデル」における固有の機能である「対等に向かい合わせ続けること」では、その目指すべき目標は相互援助システムの形成とその発展にある。相互援助システムは、問題解決への媒体であるとともに、本人の自己決定のための媒体でもある。

ここでは、先に提示したシュルマンによる9つの力動を下地にしながら、相互援助システムにおける問題解決のメカニズムを5つのダイナミクスにまとめて提示する。問題解決の媒体となるここでの相互援助システムは、グループワークを含めたソーシャルワーク全体を視野に入れた問題解決の重要な概念として発展させている。

なお、これらのダイナミクスは、後述する「媒介・過程モデル」の援助過程の4つめの段階である「相互援助」の段階のダイナミクスにほぼ相当する。このモデルの援助過程とは、相互援助システムの完成に向かうプロセスであるから、本来的には相互援助システムの特質を理解するためそこに至るまでのプロセスが重要となる。ここでは、その結果としての相互援助システムの問題解決に向けた力動について提示する。

(i)「運命共同体」としてのシステム

問題解決の媒体となる相互援助システムの成立要件の一つは、クライアントとシステムが両者間に結ばれた対等な関係と相互の共感的支持を基盤とした「運命共同体」

としての関係と意識を育てることである。相互援助システムは、共生システムとしての特質をもつ。構成員間に共生的関係で結ばれた共生システムは「共に成長すること、つまり「双利共生」を基礎にしており、どちらか一方が犠牲になったり、どちらか一方が不利益を被ることはない。自分たちが運命を共にする同じ舟に乗っていることを、システムとクライアントの双方が認知しなければならない。問題解決のプロセスは、双方共に利益を得る創造的な解決策を手を取り合いながら模索するプロセスなのである。

「運命共同体」とは、クライアントとシステムの双方が「当事者」として共通の基盤の上に立つことを意味している。その共通の基盤とは、どちらの生活や人生にもお互いの存在自体が影響を与え合うという共通認識をもつことである。家族であれ地域であれ、本人の問題を解決することは、本人と自分を含んだシステム全体の行く末を決めることであるといえる。相互援助システムにおける問題解決とは、自分たちの運命を決める新しいシステムを創出することである。

(ii) 現実に目を向ける情報開示とコミュニケーション
相互援助システム内においては、公正な情報の分かち合いと健全なコミュニケーションの様式を確立することが問題解決への一つの要件となる。

本人の生活状態や生活問題、またクライアントとシステムを取り巻く環境は刻々と変化する。それらの情報についてワーカー、クライアント、システムが絶えずオープンにし、それを共有することができなければならない。その情報には、お金や性といったいわゆるタブー領域の内容の取り扱いをも含んでいる。

さらには、そうした情報の開示とそれに伴う感情を正確に相手に伝えるコミュニケーション様式の確立も相互援助システムの特質の一つである。言語・非言語のコミュニケーションを通して事実と感情の共有化がもたらされることは、問題解決へ向けて手を取り合う協力的体制のための基礎要素となる。

これらの情報の分かち合いと健全なコミュニケーションは、絶えず「現実」に目を向けていくことを意味している。「現実」から目を逸らし、架空や想像上の「問題」を作り上げてしまうことは、本質的な問題解決につながらなくなる。相互援助システムとは、そうした「現実」を受け入れることのできる器となるのである。

(iii) 相互要求

完成された相互援助システムは、お互いの存在を必要

としている構成員の集合体である。したがって、対等な関係の深まりと相互共感及び相互理解に立った上で、焦点化された課題が明確になると、具体的問題を解決するために向かい合う相手に対して要求や変化への期待が生じるようになる。つまり、問題解決に向けた相互要求というダイナミクスが相互援助システム内に生起するというのである。

媒介者であるワーカーは、この相互の要求の内容を向かい合う相手に正しく伝え、その反応をフィードバックする役割を担う。さらに、その双方向からの要求を擦り合わせ、個々のニーズの充足だけでなく、それがシステム全体の創造的成長へと展開できるように支援することになる。

このプロセス自体が問題解決に向けた相互援助システム内における相互作用の促進となり、新しいシステムを創る具体的作業となる。

(iv) 具体的な取り組みとフィードバック

相互の要求の擦り合わせの延長線は、問題解決に向けた具体的な取り組みにつながる。相互援助システム内においては、具体的な解決方策を相互の要求の延長線に導き出し、その方策に共に取り組むことになる。媒介者であるワーカーはクライアントとシステムの相互作用を通して、こうした問題解決に向けた具体的な動きをつくること、その取り組みを支援すること、そして取り組みによる結果や変化をフィードバックすること、さらにそこから次の方策を導き出すことという一連のサイクルを支援し続けることが求められる。

問題解決への取り組みにおいて、こうした試行錯誤と軌道修正を可能にするのも相互援助システムの特質である。通常、魔法のような方法で短期間に問題解決がなされることはない。解決方法を模索・検討する時間を必要とするし、また複数の実践の積み重ねによって解決に至ることもある。完成された相互援助システムにおいては、うまくいかない取り組みによってバランスが崩れることがあってもシステム自体が自ら立ち直る補正力を備えている。

(v) 関係の進展と新たなシステムの創出

以上述べてきた相互援助システムとしての問題解決への取り組みのプロセスは、結果として対等な関係を起点としたクライアントとシステムの間を進展させ、新たなシステムを創出することになる。クライアントやシステム側の個人レベルでの気づきや変化という一つの「要素」の変化は、新たなシステムへのきっかけとなる。そ

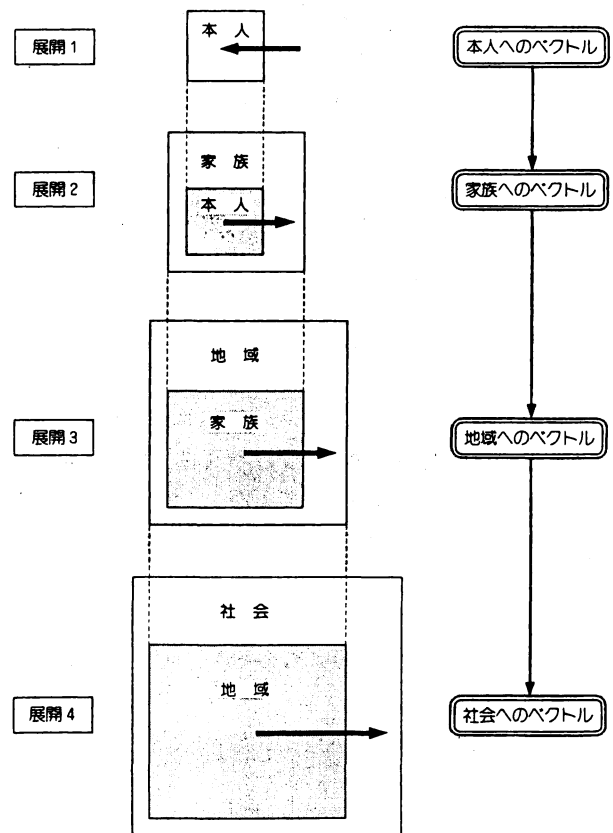
の問題解決を通じて生成された新たなシステムは、より強化された相互援助システムであるとともに、問題解決だけではなく共に生きるための共生システムとなる。

さらに、相互援助システムは、システム内だけではなくシステム外との接触によりシステム同士の関係を進展させることにより、多層レベルで相互援助システムが形成される。それにより、問題解決のレベルも相乗的に向上することになる。

③援助の4つのベクトル

「媒介・過程モデル」の3つめの特質は、この媒介機能を支える援助のための基礎概念である。その概念を「援助の4つのベクトル」として提示する。「ベクトル」とは、本来大きさや方向をもった量を意味するが、ここでの「援助のベクトル」とは方向性をもった援助の大きさという意味で抽象化して用いることにする。

「援助の4つのベクトル」の全体像を図4で示した。＜展開1＞から＜展開4＞にかけて、対象となるシステムが本人、家族、地域、社会へとサイズが大きくなり、それぞれに「援助の4つのベクトル」として、本人への



出所：岩間伸之「障害系の子も家庭福祉サービス援助の4つのベクトル」 柏女霊峰・山縣文治編著『新しい子ども家庭福祉』ミネルヴァ書房, 1998, p. 176.

図4 援助の4つのベクトル

ベクトル、家族へのベクトル、地域へのベクトル、社会へのベクトルが図示されている。また、図中の点線は、「本人」(クライアント)が「家族」に含まれ、その「家族」は「地域」に含まれ、さらにその「地域」はより大きなシステムである「社会」に包含されることを表している。この4つのベクトルの考え方は、当面の当事者である本人(クライアント)を援助の起点として位置づけ、そこから援助を順次展開すること、そして展開とは2つのシステムが新しいシステムを創造することを意味している。

当然のことながら、ここでは象徴的概念として便宜上本人、家族、地域、社会の4つの大きさのシステムをとり上げたが、それ以外のシステムとも新しいシステムを創り出す必要がある場合もあるし、それぞれの組み合わせが必ずしも一方のシステムを包含するとも限らない。

この「援助の4つのベクトル」の概念の特質及び「媒介・過程モデル」との関係について、次の3点から明らかにする。

第1の特質は、援助とは本人を起点として展開すべきであるということである。援助の出発は、生活問題をもつ当事者である本人自身へのアプローチ、つまり「本人へのベクトル」から始まる。これは、問題や課題の解決に向けて本人の変容を促すという意味ではなく、本人がまずは問題解決のための主体者となれるような援助から始めるということである。本人を援助の起点とするということは、主体である本人自身が自分の人生を歩んでいくのをワーカーが支援していくことを意味する。このアプローチは、「媒介・過程モデル」に限らずソーシャルワークの原理・原則である主体性や自己決定の尊重の原則に立脚するものである。そうした主体者としての態度の形成のための基本要素となるのが、クライアントとワーカーとの援助関係の構築、受容や共感、傾聴、非審判的態度等であることはいまでもない。そしてこの「本人へのベクトル」から周囲の環境(家族、地域、社会等)との相互作用を通して、新しい関係システムづくりや本人の気づきを促していくのである。

第2の特質は、「援助の4つのベクトル」には新たなシステムを創造するという考え方を含んでいることである。援助の展開とは、本人への援助を起点として、そこからより大きなシステムを順次創出していくことである。本人から家族、家族から地域、地域から社会というようにより大きなシステムへの展開は、それぞれの過程における新しいシステムの創出を意味する。創出とは、2つのシステムが会合することによって、全く新しいシステムを生み出す、極めてクリエイティブな活動である。

それは、どちらかが不変のまま、もう一方に合わせることではない。〈展開2〉を例にあげるならば、本人を含む新たな家族システムの創造は、本人が家族に合わせることでなく、また家族が本人に合わせることでない。つまり、双方の交渉によって新たな家族システムをつくり上げることなのである。これはシステム理論を背景としたエコロジカル(生態学的)な視点からの「適応」の概念でもある。

それでは新たなシステムを創出するためのワーカーの機能とは何か。つまり、新しいシステムを創造するためにはワーカーが何をしたらよいかというベクトルに関与するワーカーの役割とは何かということである。これが第3の特質であり、「媒介・過程モデル」と密接な接点をもつものである。つまり、新たなシステムを創出するためのワーカーの機能が「媒介・過程モデル」における「媒介」なのである。2つのシステムを「対等に向かい合わせること」によって新たなシステムを創造する。「援助の4つのベクトル」においては、本人へのベクトルから出発した上で、家族へのベクトルでは「本人」と「家族」を、地域へのベクトルでは「家族」と「地域」を、さらに社会へのベクトルでは「地域」と「社会」とを「対等に向かい合わせ続けること」によって、それぞれ新たなシステムを生み出す過程を支えることがワーカーの仕事なのである。

以上のように、本人を援助の出発点とし、そこから新しいシステムを創造し、そしてその創造を促すのが媒介者であるワーカーの役割であるという「援助の4つのベクトル」は、「媒介・過程モデル」を支える基礎概念の一つとなるものである。

④援助過程 - 5つの相互作用の特質 -

「媒介・過程モデル」における援助過程もその特質の一つである。なぜなら援助過程とは、モデル固有の機能の時系列からみた具体的展開のことであるからである。ソーシャルワークのモデルの構築にあたっては、援助過程の明示は不可欠な要素でもある。ただしその場合には、援助過程の特質とそのモデルにおける固有の機能とが密接な整合性をもつものでなければならない。したがって、「媒介・過程モデル」における援助過程の特質は、このモデル固有のソーシャルワーク機能として提示した「媒介」(対等に向かい合わせ続けること)の具体的な展開でなければならない。

ここでは、「媒介・過程モデル」の援助過程の前提となる相互作用モデル(グループワーク)における援助過程に関する研究を提示した上で、「媒介・過程モデル」

における援助過程について概観する。

(i) 相互作用モデル（グループワーク）における援助過程研究

「媒介・過程モデル」の援助過程研究の下地となる相互作用モデル（グループワーク）の援助過程に関しては、既に明らかにした内容⁹⁾であるので、ここでは次の「媒介・過程モデル」における援助過程の論考に必要な内容についてのみ明らかにする。

シュワルツのグループワーク論は、一面では哲学的あるいは抽象的であるという指摘がされてきた。彼の理論を継承し具体化するためにシュルマン(Lawrence Shulman)は、「スキル」(援助技術)の概念を導入することによって具体化に貢献した⁷⁾が、もう一方の具体化として「プロセス」(援助過程)の視角からの検討も相互作用モデルを深めるためには重要である。当然のことながら、実際の援助過程は必ずしも定型のモデルに沿って展開されるわけではないが、モデル研究においては援助過程の考察は不可欠な要素である。

この援助過程研究の焦点は、メンバーとメンバー（グループ）との間に結ばれる「関係の質」に当てる。つまり、図2のトライアングルモデルにおけるメンバーとシステムとの間の「相互作用関係」に焦点を当てるということである。従来、グループワークにおける援助過程研究は、グループダイナミクス研究等によって明らかに

されたグループの発達理論に依拠しながら、メンバーの言動やワーカーの援助行動を時系列で明らかにしたものが多かった。ここでの相互作用モデル（グループワーク）の援助過程研究では、シュワルツ理論に基づいてメンバー間の「相互作用関係」の質に焦点を当てた。

援助過程研究の展開方法としては、シュワルツが説明する準備期・開始期・作業期・終結期という援助の4段階について、開始期以降をさらに①相互確認、②相互交渉、③相互浸透、④相互援助、⑤相互受容という5段階の援助過程に細分化して考察することを試みた。これらを導き出す方法として、シュワルツ及びシュルマンらの文献の分析に加えて、グループワークにおけるグループの発達段階論として評価の定まっているガーランド(James A.Garland)らによる「ボストンモデル」と対照しながら考察した。このモデルにおいては、グループの発達段階を、①参加の初期(pre-affiliation)、②権力と統制(power and control)、③親密さ(intimacy)、④分化(differentiation)、⑤終結と移行(termination or transfer)の5段階に分けて説明している⁸⁾。

シュワルツが提示した「取り組みの段階」と、その各段階においてワーカーが目指すべきメンバーとシステムとの間の「相互作用」とを照合させ、さらにそれぞれにおける「ワーカーの媒介機能」「グループ及びメンバーの力動」の要点を整理したものを表1で示した。なお、

表1 相互作用モデルにおけるグループワークの援助過程

	相互作用の特質	ワーカーの媒介機能	グループ及びメンバーの力動
準備期		(波長合わせ)	
開始期	I 相互確認	① メンバーとワーカーの存在認知	システム（グループ）の境界の確認。成長への始動。
		② 契約の促進	メンバーと施設・機関の要求の明確化。ワーカーの役割の明確化。
作業期	II 相互交渉	① 契約内容の修正と深化	メンバーに共通する問題の明確化。グループの存在意義の明確化。
		② 共通基盤の形成	メンバーが向き合うための共通項の形成。問題解決への始動。
	III 相互浸透	① 問題の理解と分かち合いの促進	各メンバーの状況理解。メンバー相互の共感。相違点の認識。
		② 影響の与え合いの促進	新しい発見や気づき。問題認識の変化。「いま、ここで」の関係性の強調。
IV 相互援助	① 助け合いの促進	問題解決に向けてお互いの存在を必要とする「相互援助システム」の完成。	
	② 「触媒者」としての働きかけ	創発的なグループ活動。ワーカーを情報提供者として活用。	
終結期	V 相互受容	① 自分自身の受容への働きかけ	メンバー自身の変化の気づき。
		② メンバーの受容への働きかけ	メンバーの変化の認知。メンバーの尊重と支持。感情の交流。
		③ グループの受容への働きかけ	グループの変化の認知。グループの存在意義の確認。

シュワルツはメンバーが実際に顔を合わせるまでの段階を「準備期」とした。当然のことながら、メンバー間に「相互作用」は生じないが、シュワルツはこの段階において、「波長合わせ」(tuning-in)と呼ばれる「予備的感情移入」というワーカーの仕事を重要視している。

(ii)「媒介・過程モデル」における援助過程への展開

「媒介・過程モデル」における援助過程に関する論考内容は、シュワルツの援助モデルを具体化するために考察した前述のグループワークの援助過程研究を基礎としている。その特徴は、シュワルツが説明する準備期・開始期・作業機・終結期という4つの取り組みの段階を基礎としながら、クライアントとシステムとの相互作用の特質とその変化に焦点を当てた援助過程を提示したところにあった。その援助過程とは、開始期以降を①相互確認、②相互交渉、③相互浸透、④相互援助、⑤相互受容の5段階に分けるものである。

「媒介・過程モデル」における援助過程では、これをグループワークを含めたソーシャルワーク全体に視野を広げるとともに、「媒介・過程モデル」がもつ固有の特質を援助過程の中に具体的に反映させた。つまり、「対等に向かい合わせ続けること」の具体的展開と目指すべき目標であった理想的な状態としての「相互援助システム」を援助過程の中で明示した。

表2において、表1をソーシャルワーク版として発展させた「媒介・過程モデル」における援助過程を「相互作用の特質」「ワーカーの媒介機能」「クライアントとシステムの変化及び相互作用関係の力動」のそれぞれについて表にして示した。さらに図3で提示した「媒介・過程モデル」における媒介機能と5つの援助過程との関係を図5で示した。

第1段階がシュワルツのいう開始期にあたる「相互確認」の段階である。この段階は、クライアントとシステムが対等に向かい合うための最初期の段階として位置づけられる。これは、図5の(A)から(B)の状態に移行する過程の状態である。

この段階でのワーカーのすべき最初の媒介の仕事は、2つの内容を含んでいる。その一つは、クライアントとシステムが向かい合うべき対象の存在を相互に認知できるように働きかけることである。それによってもたらされるクライアントとシステムの力動及び相互作用関係は、向かい合う対象の認知、ワーカーとの信頼関係の構築、相互の存在認知と新しい相互作用関係づくりへの始動である。もう一つの仕事が、契約の促進である。ここでは、ワーカーの働きかけによって、その時点でのクライアントとシステム相互の立場・状況・要望を認知すること、機関及びワーカーの役割を認知すること、そしてそれらを踏まえて問題解決への主体的態度の形成をもた

表2 「媒介・過程モデル」における援助過程

	相互作用の特質	ワーカーの媒介機能	クライアントとシステムの力動及び相互作用関係
準備期		(波長合わせ)	
開始期	I 相互確認	① 存在の相互認知	向かい合う対象の認知。ワーカーとの信頼関係の構築。相互の存在認知と新しい相互作用関係づくりへの始動。
		② 契約の促進	その時点での相互の立場・状況・要望の認知。機関及びワーカーの役割の認知。問題解決への主体的態度の形成。
作業期	II 相互交渉	① 共通基盤の形成への働きかけ	問題解決に向けて向き合うことの必要性の認知。
		② 対等な向かい合いへのアドボカシー	問題解決に向けた「対等な関係」の形成。
	III 相互浸透	① 問題の理解と分かち合いの促進	「いま、ここで」の関係性の萌芽。相互理解と相互共感。問題解決への始動。
		② 影響の与え合いの促進	新しい気づきの促進や真のニーズの発見。問題認識の変化。自己決定への歩み。
IV 相互援助	① 助け合いのシステムづくり	「相互援助システム」の形成。「運命共同体」の構築。情報の分かち合いと健全なコミュニケーション様式の形成。相互の要求。	
	② 「触媒者」としての働きかけ	問題解決への取り組みとそのフィードバック。問題解決に向けた新たなシステムとの交渉。新たな関係づくりの進展。	
終結期	V 相互受容	① 相互尊重の促進	「かけがえない存在」としての認識。感情の交流。
		② 相互評価の促進	プロセスの振り返り。自身と対象の変化の気づきと受容。新たなニーズの気づきと次への始動。

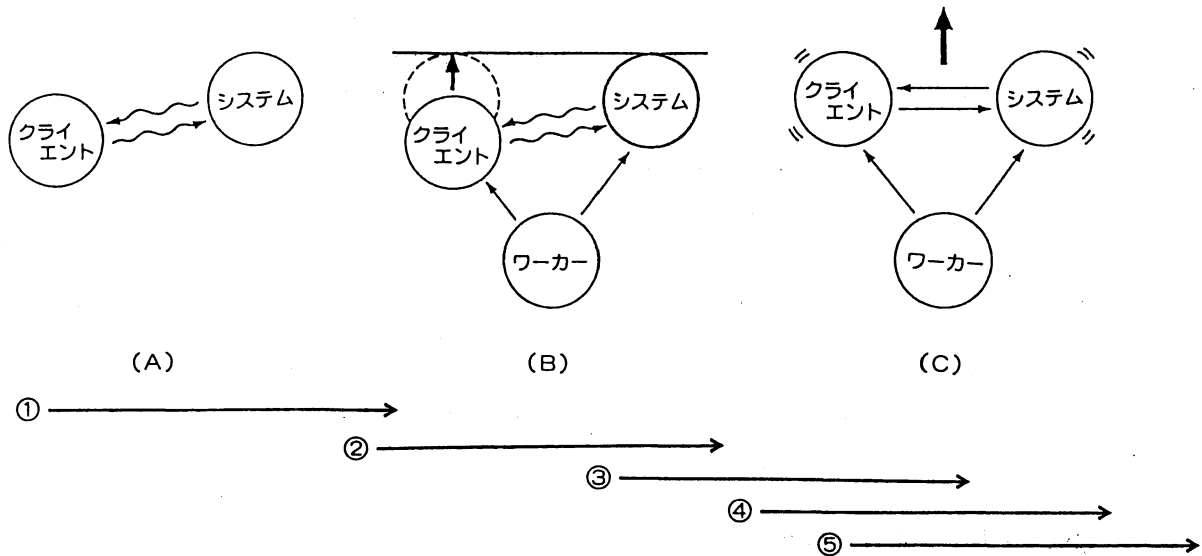


図5 「媒介・過程モデル」における媒介機能と援助過程

らすことになる。

第2段階が「相互交渉」の段階である。この段階は本格的な媒介機能を展開する作業期の前期にあたる。相互作用の特質が「相互交渉」であるように、相互作用の活発な促進によって共通基盤の形成をもたらし、また対等な向かい合いへのアドボカシーを実践するという「媒介・過程モデル」においては極めて重要な意味をもつ段階である。図5で示すように、相互確認の段階を受けて(B)の状態を具体的に展開する段階である。

この段階でのワーカーの媒介機能は、共通基盤の形成への働きかけと対等な向かい合いへのアドボカシーの2点である。共通基盤の形成への働きかけとは、クライアント及びシステムが問題解決に向けて向き合うことの必要性を認知することであり、また対等な向かい合いへのアドボカシーとは問題解決に向けた「対等な関係」を形成することである。

第3段階が作業期中期にあたる「相互浸透」である。この段階は、対等に向かい合った関係を基底として新たな関係が形成され、互いの存在が相互により深く影響を与え合う段階である。この段階は、図5で示す(B)の終盤から(C)の初期段階に相当する。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求められる。第1の媒介機能は、問題の解決と分かち合いの促進である。対等な関係のもとで前段階をさらに進め、向かい合う相手の立場に立って問題を理解し、それぞれの思いを分かち合えるようにする。それは、「いま、ここで」の関係を芽ばえさせ、相互理解と相互共感を促進し、システムとして問題解決に向けて動き出すことである。第2の媒介の仕事は、影響の与え合いの促進である。ワ

ーカーの媒介による相互作用の中で、新しい気づきや真のニーズの発見、問題認識の変化を促す。これは、当事者たちが、問題は自分たちで解決するしかないという覚悟を決めること、つまりは自己決定への歩みを始めることである。

第4段階が作業期の後期にあたる「相互援助」の段階である。この段階は、ワーカーの媒介の到達目標であった「相互援助システム」の形成とそのシステムのダイナミックスによる具体的な問題解決を促す段階である。この段階は、図5で示す(C)の状態そのものの段階に相当する。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求められる。第1の媒介機能は、助け合いのシステムづくりである。これは、影響の与え合いを発展させ、問題の解決に向けてお互いの存在を必要とする「相互援助システム」を形成することに集約できる。そこには、「運命共同体」としての関係と意識を育てること、現実の情報の分かち合いと健全なコミュニケーション様式を形成すること、さらには、問題解決に向けた相互の要求を打ち出していくことが含まれる。第2の媒介機能は、「触媒者」としての働きかけである。ワーカーが「触媒者」として相互援助システムに刺激を与え、さらに創発的な相互作用関係を進展させ、具体的な問題解決への歩みを支援することである。具体的には、問題解決への取り組みとそのフィードバック、問題解決に向けた新たなシステムとの交渉によって、新たな関係づくりをもたらすことになる。

第5の段階が、終結期にあたる「相互受容」の段階である。媒介者であったワーカーがその役割を終える段階である。この段階は、図5で示す(C)の状態を終了す

る段階に相当する。当事者たちによる新しいシステムは、独り立ちして歩き始めることになるが、クライアントとシステムの関係が解消される場合もある。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求められる。第1の媒介の仕事は、相互尊重の促進である。最終にあたっての感情の交流を促し、お互いにかげがえのない存在として認識し、尊重し合えるように働きかけることである。第2の仕事が相互評価の促進である。これまでのプロセスを振り返って、自身と相手の変化に気づき、それを受容できるように働きかける。そして新たなニーズへの気づきがある場合には、新たな向かい合いへの始動を促すことになる。

3. 「媒介・過程モデル」における援助過程

ここでは、「媒介・過程モデル」の特質のうち、4つめの特質であった援助過程についてさらに論考を深めることにする。この内容は、「媒介・過程モデル」における「媒介」の機能、つまり「アドボカシー」と「自己決定」を含めた「対等に向かい合わせることを」具体的に提示することになる。

1) 相互確認

第1段階がシュワルツのいう開始期にあたる「相互確認」の段階である。この段階は、クライアントとシステムが対等に向かい合うための最初期の段階として位置づけられる。これは、(A) から (B) の状態に移行する過程の状態である(図5)。

この段階でのワーカーのすべき最初の媒介の仕事は、2つの内容を含んでいる。その一つは、クライアントとシステムが向かい合うべき対象の存在を相互に認知できるように働きかけることである。それによってもたらされるクライアントとシステムの力動及び相互作用関係は、向かい合う対象の認知、ワーカーとの信頼関係の構築、相互の存在認知と新しい相互作用関係づくりへの始動である。

もう一つの仕事が、契約の促進である。ここでは、ワーカーの働きかけによって、その時点でのクライアントとシステム相互の立場・状況・要望を認知すること、機関及びワーカーの役割を認知すること、そしてそれらを踏まえて問題解決への主体的態度の形成をもたらすことになる。

相互確認の段階におけるこれら2つの媒介機能について検討する。

①存在の相互認知

ワーカーによる媒介機能の最初の展開過程であり、媒介機能を以降展開していくための基盤となる極めて重要な段階として位置づけられる。

この段階でワーカーに求められる媒介の仕事は、次の3つに整理できる。

第1の媒介の仕事は、媒介によって向かい合わせる対象を選択し、お互いが認知できるように働きかけることである。媒介のための焦点を限定することが媒介機能を遂行するための最初の仕事となる。その判断は、当然のことながらクライアントの置かれた状況及び問題の把握に依拠することになる。

クライアントとシステムの関係は、基本的にはシステムとサブシステムの関係、もしくはシステムとスーパーシステムの関係にある。つまり、媒介すべき対象は、クライアントとクライアントを含む一つ上位のシステムと向き合うことにある。これは、先に提示した最も小さなシステムである個人からより大きなシステムへと段階的に展開していくという「援助の4つのベクトル」の考え方に基づくものである。例えば、クライアント本人とその配偶者、クライアント本人と家族、家族と地域、地域と行政というような媒介が考えられる。二者間のシステムの質量の差異が大きいほど向き合うためには必要となるエネルギーが大きくなる。実際には、クライアントとシステムとしての組織等の集合体とが向き合うわけではなく、クライアントとある集合体において向き合うべき人物とを媒介することになる。

ワーカーにとって媒介すべき対象は一つとは限らない。問題の状況に応じて複数のシステムを同時に媒介の対象としなければならない場合もあるし、優先順位をつける必要がある場合もある。ケースの進展に併せて媒介すべき対象も当然のことながら変化していく。

第2のワーカーの媒介の仕事は、媒介の前提となるワーカーとの援助関係を確立することである。ワーカーがクライアントとシステムの双方に働きかけ、両者間の相互作用関係を促進させるための前提となるのは、ワーカーと双方のシステムとの信頼関係に裏打ちされた援助関係を構築することである。双方に向かい合わせ、相互作用関係の中から新たな関係の展開を促すというワーカーの唯一の武器は、この援助関係である。言うまでもなく、ここでは受容や共感的態度を基礎とした面接技術を要する。

この「媒介・過程モデル」における援助関係は、「媒介する」という点で重要な意味をもっている。ここでいう「媒介する」とは、「対等」な関係を構築し、それを保持し続けることであった。ワーカーは、この援助関係

を通して両者間の対等性を見極めることになる。対等かどうかの判断は、特定のスケールによって数値化されるものではなく、援助関係を通じた専門的判断によるものでなければならない。

第3の媒介の仕事は、相互の存在認知と新しい相互作用関係づくりへ向けて始動を促すことである。具体的な媒介の最初の働きかけは、双方のシステムがワーカーと共に選択した向かい合うべき対象の存在をお互いに認知するように働きかけることである。換言すれば、双方が対等に向かい合うべき相手を意識化することである。問題解決に向けた新しい相互作用関係づくりを始動させる段階ともいえる。

この段階で重要なのは、双方のシステムが相互援助のための新しい関係を再構築するためのスタートを切るという意識を持たせることである。つまり、それまでの既存の関係を完全に皆無にすることはできないものの、必要以上に過去の関係に引きずられないことが求められる。もちろん、この時点でそれが完遂できるものではなく、援助過程の中で徐々に深化させていくものである。

②契約の促進

相互確認の段階におけるもう一つの仕事が、シュワルツ自身もその重要性を強調する契約の促進である。ここでいう契約とは、その時点でのクライアントとシステム相互の立場や状況・要求や要求を明示するとともに、機関や所属するワーカーの役割や援助内容を提示することである。この「媒介・過程モデル」における援助とは、クライアントやシステムが自分たちで最善の決定ができるように支援していくことであるから、こうした契約の促進によって本人たちの問題解決への主体的態度の形成を促すことにもつながる。

開始期の中心課題として「契約」を明確化したシュワルツは、この段階におけるグループワーカーの課題を4つに整理している。それは、①なぜサービスが提供されるのかをはっきりと述べること、②機関とグループにおけるワーカーの役割を述べること、③ワーカーの述べたことに対してメンバーの反応を促し、彼らの考えや要求とどのように一致点を見いだすかを考察すること、④ワーカーとメンバーが共に取り組んでいくためのテーマと枠組みに関して合意を見いだすこと、であった。

「媒介・過程モデル」において、この段階でワーカーに求められる媒介の仕事は、集約すれば次の2つに要約できる。

第1の媒介の仕事は、その時点でのクライアントとシステム相互の立場・状況・要望を明確化することであ

る。

「媒介・過程モデル」における契約の内容には、援助活動の前提となる初期段階の相互作用を促すことを含み、それはクライアントとシステムが対等に向き合うための具体的な問題解決に向けた予備的条件を整えることである。これは「なぜワーカーによる援助が提供されるのか」を双方に気づかせるための作業であるが、当然ながらこれらについて当事者たちが意識化していない場合もある。

ここでのワーカーの媒介機能の内容は、クライアントとシステムそれぞれの置かれた立場や状況、そして相手への要求を相互に確認することである。これは前述の存在の認知を一步進めたものであり、次段階の相互交渉へ至る準備過程でもある。ただし、ここでは仮の共通基盤を形成することが目的となり、この段階では特に当事者たち自身の認識を明確にすることになる。そうした当事者たちの主観的な内容を中心としながら、場合によっては客観的な事実やワーカーとそれぞれとの援助関係を通して把握した感情をもワーカーのサポートによって双方に伝えることになる。この媒介とは、双方が直接的に顔を合わす場を提供するだけでなく、ワーカーが情報を双方に伝えることも含んでいる。

第2のワーカーの仕事は、機関及びワーカーの役割を明確化することとそれに基づいて問題解決への主体的態度を形成することである。これらの具体的な内容としては、ワーカーの所属する援助機関が提供できるサービス内容及び範囲を明らかにした上で、ワーカーの役割を明確にすることである。このモデルにおいて強調すべき点は、ワーカーの役割とは問題解決に向けて「媒介すること」であることをクライアント及びシステムに対して明示することである。つまり、ワーカーが問題を解決するのではなく、ワーカーの仕事とは当事者たちが自分で問題を解決していくプロセスを支援することであることを明示し、それによって問題解決への主体的態度を醸成することである。

ここでの契約の内容には、向かい合うべき相手の存在を認知した上で、この2つの媒介の仕事を通して、この時点でこれから共に取り組んでいくための仮のテーマと枠組みを明らかにすることも含んでいる。この内容は、次段階で修正と深化の対象となる。

2) 相互交渉

第2段階が「相互交渉」の段階である。この段階は本格的な媒介機能を展開する作業期の前期にあたる。相互作用の特質が「相互交渉」であるように、相互作用の活

発な促進によって共通基盤の形成をもたらし、また対等な向かい合いへのアドボカシーを実践するという「媒介・過程モデル」においては極めて重要な意味をもつ段階である。これは、相互確認の段階を受けて（B）の状態を具体的に展開する段階である（図5）。

この段階でのワーカーの媒介機能について、共通基盤の形成への働きかけと対等な向かい合いへのアドボカシーの2点について明らかにする。共通基盤の形成への働きかけとは、クライアント及びシステムが問題解決に向けて向き合うことに必要性を認知することであり、また対等な向かい合いへのアドボカシーとは問題解決に向けた「対等な関係」を形成することである。これらの2つの媒介機能は、同時並行で遂行される。

①共通基盤の形成への働きかけ

ここで求められるワーカーの媒介の仕事は、シュワルツが強調した共通基盤の形成に向けた取り組みのことである。この共通基盤とは、問題解決に向けてクライアントとシステムが向き合うこと、そしてお互いに手を取り合うことの必要性をクライアントとシステムの双方が認識することを意味している。そこに至るまでのプロセスは、本格的な相互作用の促進によって相互に交渉し合うことによってもたらされる。また同時に、ここでの内容は前段階での契約の内容の調整及び修正を含んでいる。

ワーカーが媒介者として働きかける具体的な内容は、段階別に次の3つに集約できる。

まず第1の媒介の仕事は、双方が正しく自分の情報を相手に伝え、それをお互いに正しく理解できるように媒介することである。クライアント側とシステム側がそれぞれの置かれた立場や状況、さらにはこうありたいという要望についてワーカーが媒介者となって双方の橋渡しをすることである。ワーカーの媒介の仕事は、双方に働きかけて意識化すること、言語化等による相手への伝達を支援することである。したがって、場合によっては正しく伝えたいことが相手に伝わるように、当事者の代わりに相手に伝えたり、言葉を補ったり、理解しやすいように換言したりすることが求められる。

第2のワーカーの媒介の仕事は、相手についての認識の修正を促すことである。正しい情報が交換された上で、その次のステップはそこで相手についての客観的な状況及び要望についてこれまで考えてきた認識を修正できるように働きかけることである。向かい合うべき相手についてのこれまでの認識の違いに気づきを促すことは、相互に手を取り合うための基盤づくりの前提をつくることになる。

第3の媒介の仕事は、以上を踏まえた上で両者が向かい合い、相互に手を取り合うことの必要性を意識化させ、それを確認することである。クライアント及びシステムの要望や要求を満たすためには、お互いの存在が必要であること、そして課題の達成や問題の解決に向けて向き合いながら協働すること、さらにそのプロセスを促進させるワーカーの存在が必要となることも再確認することになる。

②対等な向かい合いへのアドボカシー

相互交渉のもう一つの媒介の仕事は、先の共通基盤の形成を前提とした媒介機能による対等に向かい合うためのアドボカシーである。この媒介機能は、「媒介・過程モデル」の4つの基礎概念の一つであり、アドボカシー機能を内包する点にモデルとしての特性がある。機能としての「対等に向かい合わせる」とは、図3及び図5の（B）段階における力動的状態を指す。この段階におけるワーカーの仕事は、クライアントとシステムを点線の位置、つまり「対等に向かい合う位置」にまで持ち上げることであった。

こうしたアドボカシー機能のポイントを整理しておくならば、媒介機能を遂行するワーカーの立場性及びその力動性は媒介者としての位置によって強く性格づけられるということを前提とした上で、①ワーカーの定位置は「援助的均衡のとれた中立的立場」であること、②このモデルにおける援助の過程は、クライアントとシステムとの対面的相互作用関係を展開軸とすること、③クライアント及びシステムは、信頼関係に裏打ちされたワーカーとの援助関係を援助の前提としていること、の3点であった。

この相互交渉の段階におけるワーカーの媒介の仕事は簡潔にまとめるならば、前述の共通基盤の形成を念頭に置きながら、クライアントとシステムの双方と援助関係を形成し、クライアントの代弁や弁護等の擁護活動を含めて両者の相互作用関係を促進させ（交互交渉）、対等な関係を構築するという働きをすることになる。

この対等な関係は、両者の置かれた環境が変化しようともワーカーの媒介機能によって常に発展的に維持される。この後、この対等な関係を起点として、問題の解決や課題の達成をもたらすよう働きかけることになる。

3) 相互浸透

第3段階が作業期中期にあたる「相互浸透」である。この段階は、対等に向かい合った関係を基底として新たな関係が形成され、互いの存在が相互により深く影響を

与え合う段階である。この段階は、(B)の終盤から(C)の初期段階に相当する(図5)。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求められる。第1の媒介機能は、問題の理解と分かち合いの促進である。対等な関係のもとで前段階をさらに進め、向かい合う相手の立場に立って問題を理解し、それぞれの思いを分かち合えるようにすることである。それは、「いま、ここで」の関係を芽ばえさせ、問題解決にシステムとして動き出すことでもある。第2の媒介の仕事は、影響の与え合いの促進である。ワーカーの媒介による相互作用の中で、新しい気づきや真のニーズの発見、問題認識の変化を促す。これは、当事者たちが、問題は自分たちで解決するしかないという覚悟を決めることである。

これら2つの媒介の仕事について、ワーカーの媒介機能の面からそれぞれ検討する。

①問題の理解と分かち合いの促進

この段階から具体的な問題解決に向けた取り組みが始まる。ここでのワーカーがすべき媒介の仕事は、次の3点に集約できる。整理上分けて説明するが、これらは同時並行で取り組まれる内容である。

第1の媒介の仕事は、両者の相互作用関係を促進させることによって「いま、ここで」の新たな関係の構築に向けて取り組むことである。対等な関係を起点とした新たな関係の構築は、現実を直視し、問題解決に向けた姿勢と新たなシステムを形成することを意味する。従来からの関係を必要以上に引きずるのではなく、対等な関係から発展的に関係を進展することである。これはシュワルツの理論においても重要な意味をもつものであった。

第2の媒介の仕事は、新たな関係の構築にあたって、感情の交流を重視した相互理解と相互共感を促進させることである。相手の置かれた状況について、当事者としての感情や思いをもつ存在として相互に理解を深め、さらに相互に相手の立場に立った共感を深めることである。この相互性を深化させるというのがここでの媒介機能において重要となる。

第3の媒介は、問題解決に向けて具体的に動き出すことである。現実の問題に焦点をあて、具体的に手を取り合えるように媒介する。この前提は、向かい合う相手の客観的状況について正しく理解し、さらに感情面においても間違いなくお互いに理解することである。それぞれが相手について自分の一方的な想像で向かい合ってしまうと、虚構や架空の世界で接することになり、問題や課題に対して真に正面から取り組むことができなくなる。

②影響の与え合いの促進

この相互浸透の段階におけるもう一つの媒介の仕事は、影響の与え合いの促進である。「相互浸透」の名の通り、前述の「いま、ここで」の關係に依拠した相互理解と相互共感に基づいて、さらに問題解決に向けて相互作用の質を深める段階である。その質とは、問題解決に向けた双方の「変化」を促すことである。ここでのワーカーの媒介機能は、次の3つの内容を含む。

第1の媒介の仕事は、双方が自分と相手について新しい気づきを促したり、さらに真のニーズを発見できるように働きかけることである。これは、ワーカーの媒介によって相互に相手の置かれた状況や感情についてこれまでの認識との違いを意識化することによって喚起される。それは「気づき」の促進の次元から問題解決につながる相互のニーズの明確化の可能性も含んでいる。これらの作業によって、単なる「思い込み」による「虚構」の相手に向かうことのない確固たる問題解決への前提を形成することになる。ワーカーによる媒介とは、そうした内的な変化を促すことに加えてその変化を相手に対して言語化することも重要な仕事となる。

第2の媒介の仕事は、解決すべき問題認識の変化を促すことである。その変化とは、双方が手を取り合って解決すべき課題を具体的に焦点化し、その認識を再構築することである。ワーカーは双方に働きかけて、その問題像が双方が向かい合う前の問題像とは違ったものになっていることを意識化し、とりわけ自分の立場からのみではなく、相手の立場からの問題認識の視角を加えることで立体的に問題を共有化できるように促すことになる。それは現実の問題にをしっかりと直視できることを意味する。

第3の媒介の仕事は、問題解決へ向かう自己決定の歩みを支持することである。問題認識の変化を受けて、その問題を解決するためには他人がやってくれるのではなく、自分たちで解決すべきことであるという覚悟を持たせることである。その解決とは、対等な関係に基づいて新たな解決策を創造することを双方が意識するものでなければならない。

4) 相互援助

第4段階が作業期の後期にあたる「相互援助」の段階である。この段階は、媒介による到達目標であった「相互援助システム」の完成とそのシステムの支持による具体的な問題解決を促す段階である。この段階は、(C)の状態そのもの段階に相当する(図5)。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求めら

れる。第1の媒介機能は、助け合いのシステムづくりである。これは、影響の与え合いを発展させて、問題の解決に向けてお互いの存在を必要とする「相互援助システム」を形成することに集約できる。そこには、「運命共同体」としての関係と意識を育てること、現実の情報と健全なコミュニケーション様式を形成すること、そしてそこで相互の要求を明示していくことが含まれる。第2の媒介機能は、「触媒者」としての働きかけである。ワーカーが「触媒者」として相互援助システムに刺激を与え、さらに創発的な相互作用関係を進展させ、具体的な問題解決への歩みを支援することである。具体的には、問題解決への取り組みとそのフィードバック、問題解決に向けた新たなシステムとの交渉を含んでいる。

この2つの媒介機能について検討する。なお、この段階における問題解決に向けた相互援助システムのダイナミックスは、前述した媒介・過程モデルにおける4つの特質の一つでもある。ここでは、そのダイナミックスを問題解決の媒体として活用するワーカーの機能の点からまとめることにする。

①助け合いのシステムづくり

この段階では、助け合いのシステム、つまり自己決定と問題解決のための理想的な状態である「相互援助システム」を形成することが媒介者であるワーカーの仕事となる。この仕事は、相互確認、相互交渉、相互影響という3つの段階を受けて達成されるものである。相互援助システムの形成に向けたワーカーの媒介の仕事は、次の3つの面から指摘できる。

第1の媒介の仕事は、クライアントとシステムが両者間に結ばれた対等な関係と相互の共感的支持を基盤とした「運命共同体」としての関係と意識を育てることである。相互援助システムは、共生システムとしての特質を持つ。構成員間に共生的関係で結ばれた共生システムは「共に成長する」ことを基礎にしており、どちらかが犠牲になったり、どちらかが不利益を被ることはない。そのことをシステムとクライアントの両方が認知する必要がある。問題解決のプロセスは、双方共に利益を得る創造的な解決策を手を取り合いながら模索するプロセスである。

第2の媒介の仕事は、情報の分かち合いと健全なコミュニケーション様式の形成である。生活状態や生活問題、また両者を取り巻く環境は、刻々と変化する。それらの情報についてワーカー、クライアント、システムが絶えずオープンにし、それを共有することができるようにすることである。さらにその情報には、お金や性等のタブ

領域の内容の取り扱いをも含んでいる。そして、そうした情報とそれに伴う感情を正確に相手に伝えるためのコミュニケーションの様式をつくることも必要となる。これらは、絶えず「現実」の問題に目を向けていくことを意味している。

第3の媒介の仕事は、相互に要求することを促すように働きかけることである。相互援助システムは、お互いの存在を必要としている構成員の集合体であった。焦点化された課題が明確になると、具体的問題を解決するために向かい合う相手に対して要求や変化への期待が生じるようになる。つまり、問題解決に向けた相互要求というダイナミックスが相互援助システム内に生起するということである。媒介者であるワーカーは、この相互の要求の内容を向かい合う相手に正しく伝え、その反応をフィードバックする役割を担う。さらに、その双方向からの要求を擦り合わせ、個々のニーズの充足だけでなく、それがシステム全体の創造的成長へと展開できるように支援することになる。

②「触媒者」としての働きかけ

「媒介・過程モデル」における理想的な状態としての相互援助システムが形成されれば、ワーカーの役割は必然的に変化する。それは、「媒介者」から「触媒者」への変化である。触媒者とは媒介者の延長線上にあり、システムの主体性を尊重しながら情報提供等によって刺激を与えながら変化を促し、新たな創造へのプロセスを支える役割である。つまり、相互援助システムがもつ問題解決能力を最大限に発揮できるよう支援することである。これは媒介を「し続けること」の一つの具体的な実践である。ここでは、3つの媒介の仕事がある。

第1の媒介の仕事は、問題解決への取り組みとそのフィードバックの支援である。ここでは、問題解決に向けて具体的な形で動きをつくること、そしてそれに対してどのような変化が生じたかをワーカーの媒介によってフィードバックすることの繰り返しが求められる。絶えずクライアントとシステムの取り組みが軌道修正ができるように支援していくことである。これも「媒介し続けること」の一つの内容である。

第2の媒介の仕事は、問題解決に向けた新たなシステムとの媒介である。つまり、形成された相互援助システムと別のシステムとを媒介することである。相互援助システム内では、対等に向き合う関係であっても問題解決に向けた別のシステムとの媒介が求められることがある。その媒介がさらにクライアントとシステムとの相互作用関係を促進させることになる。「援助の4つのペク

トル」の考え方によれば、そこから新しいより大きなシステムと新たなシステムを創造することであるといえる。

第3の媒介の仕事は、クライアントとシステムとの新たな関係づくりの進展を支えることである。「媒介し続ける」とは、その両者の関係の創発的發展にある。創発的發展とは、深い友好関係を結ぶことだけを意味しておらず、自分たちで自分たちの関係のあり方を決めることなのである。援助過程においては状況の変化が人間関係に大きな影響を与える。ワーカーは、その変化をも支え続けなければならない。

5) 相互受容

最後の5つめの段階が、終結期にあたる「相互受容」の段階である。媒介者であったワーカーがその役割を終える段階である。この段階は、(C)の状態から終結に向かう段階に相当する(図5)。当事者たちによる新しいシステムは、独り立ちして歩き始めることになるが、クライアントとシステムの関係が解消される場合もある。

この段階でのワーカーには2つの媒介の仕事が求められる。第1の媒介の仕事は、相互尊重の促進である。終結にあたっての感情の交流を促し、さらにお互いに「かけがえのない存在」として認識して尊重し合えるように働きかけることである。第2の仕事が相互評価の促進である。これまでのプロセスを振り返って、自身と相手の変化に気づき、それを受容できるように働きかける。そして新たなニーズへの気づきがある場合には、新たな向かい合いへの始動を促すことになる。

①相互尊重の促進

相互尊重の促進とは、援助過程の終結にあたって、相互の存在価値を確認しあうことである。ワーカーの媒介によって、クライアントとシステムの双方がお互いを「かけがえのない存在」として認識を深めることである。この段階において、これまで向かい合ってきた相手の「かけがえのなさ」を認識するための内容は、問題の解決に向けて手を取り合って解決に向けて取り組んできたこと、その過程ではお互いの存在を必要としてきたこと、さらにそれは問題解決だけではなくさらなる成長をもたらしたことを意識化することである。これらは、感情を伴う内容である。したがって、ここでのワーカーの媒介には、終結にあたっての感情面での交流を促すことが不可欠になる。

②相互評価の促進

援助過程の最終段階は、評価の段階でもある。この評価の段階は、一連の援助の終結であるとともに次の段階への開始期でもある。このモデルにおいては、当事者たちをワーカー等の第三者が評価するのではなく、本人たち自身が評価することが何よりも尊重されなければならない。なぜなら、このモデルにおいては、あらかじめワーカー等によって設定された援助目標に向けて取り組んできたわけではなく、当事者たちが最善の決定ができるように支えることがワーカーの仕事であったからである。クライアント自身がどうすればよいのかの答えは、本人自身が出すしかないという信念に基づくものである。そのプロセスをワーカーが支援することになる。

ワーカーの媒介によって、クライアントとシステムが相互評価する内容とは、それまでの援助過程を振り返り、双方が自分自身と相手の変化への気づきとその受容を促すことである。これも両者の相互作用の中で行われる。そして、その気づきと受容が、新たなニーズへの気づきを促し、自己実現に向けて新たに動き出すことをワーカーは支えることになる。

4. おわりに

本稿においては、筆者がこれまで取り組んできた「媒介・過程モデル」の特質とその援助過程に関して考察してきた。「媒介・過程モデル」の構築の目的は、このモデルの基礎理論であるシュワルツによるソーシャルワーク理論をその獨創性に基づいて深化させることと、そのプロセスにおいて「ソーシャルワークの固有性」を援助の機能面から明確にすることにあつた。

シュワルツ理論からの進展については、「対等」の概念と「プロセス」の概念をシュワルツのモデルに導入することで一歩深めることができたのではないかと考える。これは、新しいモデルを構築したというよりは、シュワルツの理論をさらに明確にしたともいえる。さらに、ソーシャルワーク固有の機能としての「アドボカシー」と「自己決定」についての機能的明確化をもたらすことになった。当然のことながら、「媒介・過程モデル」というモデルの洗練はこれからの大きな課題である。援助機能のさらなる明確化、実践における検証、質的評価の方法の洗練等が求められる。

こうした取り組みは、社会福祉の内発的發展によるソーシャルワーク固有の実践理論の構築、並びに社会福祉の理念・哲学・思想と実践を支える背景理論と援助方法との一貫した実践理論の形成に寄与するものと考えられる。

注

1) 「媒介・過程モデル」の概略は、次の論文で展開している。

岩間伸之「ソーシャルワークにおける媒介実践論研究－『媒介・過程モデル』の素描－」『社会福祉学』第37巻第2号, 日本社会福祉学会, 1996, pp.66-83.

2) ウィリアム・シュワルツのソーシャルワーク論については、次の論文で考察している。

岩間伸之「グループワークにおける相互援助システム－ウィリアム・シュワルツの遺産として－」『社会福祉学』第33巻第2号, 日本社会福祉学会, 1992, pp.137-162.

岩間伸之「グループワークにおける『媒介』の思想－W. シュワルツの実存への思索－」『同志社社会福祉学』第7号, 同志社大学社会福祉学会, 1993, pp.62-73.

岩間伸之「グループワークにおける援助過程研究－W. シュワルツによる媒介機能の展開－」『ソーシャルワーク研究』第20巻第3号, 相川書房, 1994, pp.44-49.

岩間伸之「ソーシャルワークにおけるシュワルツ理論の研究(1)－『著作集』(1994)の分析による基本的視座の形成－」『大阪市立大学生活科学部紀要』第44巻, 1997, pp.243-252.

3) 「媒介・過程モデル」における機能については、次の論文で詳細に検討している。

岩間伸之「ソーシャルワーク固有の機能としての媒介－『媒介・過程モデル』における『アドボカシー』－」嶋田啓一郎監修／秋山智久・高田真治編著『社会福祉の思想と人間観』ミネルヴァ書房, 1999.

4) 岩間伸之「グループワークにおける相互援助システム」前掲論文。

5) 「援助の4つのベクトル」は、次の文献を下地にして発展させ、構造化したものである。

『保健活動における機能訓練の意義－機能訓練が本人・家族にもたらしたもの－(平成8年度大学技術協力事業報告書)』大阪市東住吉保健所, 1997.

後藤美代・田村千賀子・安孫子千穂・野崎真実・岩間伸之「機能訓練が本人・家族にもたらしたもの－大阪市東住吉保健所における実践報告－」『保健婦雑誌』10月号, 医学書院, 1997, pp.779-784.

岩間伸之・向井久美子・後藤美代「地域における対人援助の基本的視座－機能訓練事業の事例研究からの展開－」『大阪市社会福祉研究』第20号, 大阪市社会福祉協議会・大阪市立社会福祉研修センター, 1997, pp.29-38.

なお、以下の文献では、障害をもつ子どもの領域においてこの「援助の4つのベクトル」の概念を具体的に展開している。

岩間伸之「障害系の子ども家庭福祉サービス－援助の4つのベクトル－」柏女霊峰・山縣文治編著『新しい子ども家庭福祉』ミネルヴァ書房, 1998, pp.173-196.

6) 岩間伸之「グループワークにおける援助過程研究」前掲論文。

7) Lawrence Shulman, *The Skills of Helping Individuals, Families, and Groups*(third ed.), F. E. Peacock Publishers, Inc., 1992.

8) Garland, J. A., Jones, H. E. and Kolodny, R. L., "A Model for Stages of Development in Social Work Groups", in Bernstein, S. (ed.), *Explorations in Group Work: Essay in Theory and Practice*, Boston: Charles River Books, Inc., 1976, pp.17-71.

Summary

The purpose of this study is to consider the characteristics and helping process in "mediating-process model". This model lies at the foundation of the Schwartz' theory.

The characteristics of this model is composed of four elements, 1) mediating on equal terms, 2) mutual aid system, 3) four helping vectors, 4) helping process. And this helping process has five helping stages, 1) mutual identification, 2) mutual negotiation, 3) mutual penetration, 4) mutual aid, 5) mutual acceptance.

The study of this helping Process including the concept of advocacy and self-realization shows us the characteristics of social work practice.